

統』(七九)など多数がある。

(中島久美子)

任大霖

タレン

一九一九

中国の児童文学作家。

浙江省に生まれる。杭州師範学校在学中、「小朋友」に投稿、陳伯吹に激励され児童文学を志す。一九五三年、上海少年児童出版社に入り、以後、一貫して児童文学に携わる。最初の作品集『紅泥嶺物語』(一九五二)は、謝冰心の『小さき友へ』をまね、手紙の形式で書かれた。また、代表作『こおろぎ』(七九)で、第二次少年児童文芸創作の一等賞を、『氷雪消融時節』で八六年児童文学園丁賞を受賞した。そのほか、評論もあり、幅広く活躍している。

(中島久美子)

レント プレア Blair Lent 一九三〇

アメリカ

の絵本作家。ボストン美術館スクール卒後、タブロー画家として個展を開くまでになったが、幼時からの夢を捨て切れず、絵本作家へ転向。『The wave なみ』(一九六四)で一九六五年度、コールドコット次点賞を受賞した。その後、創作上の悩みに落ちたが、日本民話をも題材にした『The Funny Little Woman おかしなおばさん』(七三)でスランプを脱したばかりか、同書によって七三年度コールドコット賞を受賞するに至った。

(金平聖之助)

任德耀

ドレンヤオ

一九一八

中国の児童演劇の作家、演出家。中国革命の功労者で、晩年は国家名誉主

席も務めた宋慶齡(一八九三—一九八二)が上海で創設

した福祉団体「中国福利会」の文化事業として、一九四七年に設立された児童劇団「中国福利会児童芸術劇院」の創設期からの指導者。数多くの作品を書き、演出から舞台美術まで担当して活躍した。『友情』、『少年サッカーチーム』、『好伙伴之歌』、『宋慶齡和孩子們』など多くの劇作品がある。現在は同劇院の名誉院長で、八二年に結成された「中国児童演劇研究会」(公的性格をもつ全国組織)の理事長を務める中国児童演劇の長老。我が国でもその代表作『馬蘭花物語』が劇団仲間により五八年に初演されて以来くり返し上演され好評を受けている。

(富田博之)

口

老

舎

しやう しゃ → ラオ ショ

朗

読

どく

声を出して読むことを一般に音読という。語句や文章などの文字言語を声に出して読む(音声化)ことで、表現内容を相手に伝えるだけでなく、理解を確かにしたり深めたりすることができる。音読の中

でも、とくに、表現を味わったり、表現内容を効果的に相手に伝え、相手にもよく味わえるように読むことを朗読という。現行の学習指導要領では、音読を第四学年までの理解領域に、朗読を第五学年以上の表現領域に位置づけている。なお教師の音読・朗読は読みの指導の一つの方法として古くから行われてきたが、学年や学習段階に応じた生かし方は今後也十分に検討されなければならぬ。なお、教師が主として昔話・童話・小説などを児童・生徒に読んで与えることを「読み聞かせ」という。文字抵抗がないので、内容の面白さを味わせ、読書にいきなう上で効果的である。

(田近洵二)

### 朗読運動

うんどう

詩歌の朗詠、中でも漢詩の朗誦は

長い歴史をもっているが、近代文学作品の朗読が運動として展開するのは昭和一〇年代(一九三五―四四)で、欧米諸国に遅れている。神保格、大西雅雄、石黒魯平らの国語音声学研究の進展につれて、朗読における鑑賞的機能と表現的機能が解明され、国語教育界が関心を抱くようになる。学芸会に朗読や朗誦が登場するのもその一部の現象であった。一般社会に関心をもたれたのは、J・O・A・K(N・H・Kの前身)が詩や文学作品の朗読を放送するようになってからである。戦時期には詩を中心とする文学作品を山本安英をはじめ、岸輝子、丸山定夫、中村伸郎、照井遷三らの俳優が、放送にレコー

ドに、演劇の間に朗読を行って社会的関心を高めた。

徳川夢声、宇野重吉らの朗読も声価を高め、北原白秋自作詩の朗読もレコードになって注目された。この動向を活用したのが大政翼賛会文化部の「国民詩」朗読運動であった。宮沢賢治の名が一般に知られていなかった時期に築地小劇場で『ざしきぼっこ』を山本安英が朗読した。そのほか三好達治の『おんたまを故山に迎ふ』を村瀬幸子が朗読したのは感動を呼んだ。こうした状況下に、子どもも朗読も盛んになり、当時の童話・児童詩の朗読が教科書教材の朗読とともに盛んになった。松田武夫、北條静子が全国を巡講して教師に朗読指導を行った。戦後は戦時期の反動もあって朗読は放置状態にあったが、六〇年代から朗読指導が見直されつつある。フランス文学者内藤濯の朗読研究と、岸田今日子、小池朝雄、宇野重吉らの作品朗読は、児童文学作品に及んで、「耳で読む」機能が開発されつつある。児童文学活動の一環として重要視されるだろう。

(滑川道夫)

ロジャンコフスキー フィオドール Fedor Ro-

jankovsky 一八九一―一九七〇 アメリカの挿絵画

家。ロシアに生まれ、モスクワ美術アカデミー卒。第一次大戦に出征、ロシア革命後パリに出て、石版の絵本『Daniel Boon タニエル・ブーン』(一九三二)でデビュー。『ペール・カストール叢書』で自然誌絵本を出

し、一九四一年渡米、一〇〇冊近い挿絵本を出す。五年にラングスタフの『Frog went a-Courtin' 蛙の嫁探し』の挿絵でコールデコット賞受賞。邦訳に『川はながれる』『のうさぎのフルー』などがある。

(吉田新一)

魯 迅 じん → ルーシユン

ロゼッティ クリステイーナ・G Christina G.

Rossetti 一八三〇〜九四 イギリスの女流詩人。イタリア人を両親に、ロンドンに生まれた。幼いころから病弱であったが、母から語学や文学や福音的信仰を受けた。兄のダンテは、絵画や文芸運動の中心人物で、画家たちとラファエル前派を結成。クリステイーナは、その機関誌「ザ・ジャーム」に優れた抒情詩を発表していたが、物語詩『妖魔の市』を含む『Goblin Market, and Other Poems 妖魔の市、その他』(一八六二)の出版で詩人として知られるようになった。ヒューズの優美な木版画が添えられた童謡集『Sing Song シング・ソング』(七二)は、繊細さと抒情性が高く評価され、広く愛読された。散文には、『ふしぎの国のアリス』によく似たファンタジー、『Speaking Likenesses ものいう肖像画』(七四)がある。作品は、幻想詩、童謡、宗教詩にわたっているが、精神的で技巧に優れ、日本では大正時代に選訳されている。

(田中瑞枝)

ローソン ロバート Robert Lawson 一八九二〜

九五七 アメリカの児童文学作家、挿絵画家。はじめは、雑誌の挿絵、舞台装置、商業美術の仕事に携わる。エッチングに長じ、アメリカ・エッチング協会より賞も受けている。本格的な挿絵画家としての最初の成功作は、マンロー・リーフ作『花のすきなうし』(一九三六)である。リチャードとフロレンス・アトウォーター夫妻の『ポッピーさんのペンギン』(三八)の挿絵も担当。エッチングの影響を受けた輪郭の明瞭で動的な描線は、写実性とユーモアを兼ね備えている。自作の『彼らは力強く善良だった』(四〇)は、物語、挿絵ともアメリカ形成期の先祖について描いたもの。この作品は、当時のアメリカの国家意識高揚の風潮と相まって、コールデコット賞を受ける。第二次大戦中には、共存共栄の主題を人間と野性の小動物の交流に託して描いた『うやぎが丘』(四四)を発表し、ニューベリー賞を獲得する。

(藤森かよ)

ロダーリ ジャンニ Gianni Rodari 一九二〇〜八〇 イタリアの児童文学作家、詩人。貧しいパン屋の息子として生まれ、小学校の教師をしたのち、第二次世界大戦後イタリア共産党の児童新聞「ピオニエーレ」の編集を担当した。と同時に、児童文学の創作にも力を注ぎ、『チポリーノの冒険』(一九五二)のような社会体制そのものを鋭く諷刺し、社会改革を求める作品によって、イタリア児童文学に新しい波をおこした。し

かし、六〇年代にはいると、作品に若干の変化が見られるようになる。『ジップくん宇宙へとびだす』(六二)は、舞台が宇宙であり、そこにロダリー独特の諷刺があるにしても、初期に見られた現実の問題からは離れている。『パジャマをきた宇宙人』(六二)にも同じことがいえる。また『空にうかんだ大きなケーキ』(六六)は、舞台は宇宙ではないけれど、原水爆問題という大きな課題と取り組んでいて、初期とは趣きを異にする。そうした中であって、『もしもし、はなしちゅう』(六二)は、ナンセンシカルな児童詩集の一群、例えば『*Filastrocche in Cielo e in Terra* 空と陸のわらべ唄』(六〇)、『*Il Libri degli Error* まちがえだらけの本』(六四)などと共通する要素を持っている。また、エッセイ集『ファンタジーの文法』(七三)は、ロダリーの創作方法をうかがううえで、見落とすことのできないものである。(安藤美紀夫)

ロツク ジョン John Locke 一六三二—一七〇四  
イギリスの哲学者。オックスフォード大学のクライストチャーチ校で哲学、政治、宗教を学び、のち自然科学、とくに医学の研究をした。一六九〇年の『人間悟性論』はカントの批評的経験論に先鞭をつけ、ペーコンの認識論を一步進めたものといわれている。子育ての方法をあらゆる角度から論じた『教育に関する考案』(二六九三)は、一八世紀の児童文学作家、児童書の出版

者に多大な影響を及ぼした。ニューベリーが子どもの本のモットーに掲げた「*instruction and amusement*」(おもしろくてためになる)の出典でもあった。ロツクは、子どもを甘やかさず質実にて育て、幼少から自己訓練をして、自発的に身体を動かすことを覚えさせ、親が子どもの手本になるようにと語っている。また、勉強は遊びを通じて楽しくやるのが最も自然なやり方であるといったり、物語として、挿絵入りの『イソップ物語』と『狐物語』を推薦したりしている。(三宅興子)

ロバーツ チャールズ Charles George Douglas Roberts 一八六〇—一九四三 カナダの詩人、作家。「カナダ文学の父」とも称され、小説、詩を含む七〇余冊の作品がある。シートンと並ぶ写実的動物物語の作家として有名。その作風はシートンより純文学に近く、エサをめぐる複数の動物が衝突した時に繰り広げられる闘い、弱肉強食の悲劇的な野生動物の生の実相を描いている。代表作に、短編集『*The Kindred of the Wild* 野性の仲間』(一九〇二)や赤狐の生涯を描いた『*Red Fox* 赤狐』(〇五)がある。(桂 有子)

ロウソン兄弟 ロウソン兄弟 Robinson Thomas Heath (一八六五?—一九五〇)・Charles (一八七〇—一九三七)・William Heath (一八七二—一九四四) 「ロウソンの三銃士」の愛称で親しまれたイギリスの挿絵画家三兄弟。祖父、父、叔父が優れた木版の彫り師で挿絵画家。三

兄弟でアンデルセンの挿絵本(一八九九)を共作したほかは別々に活動。とくにステイーヴンソンの童謡集をデザイン(二八九五)したチャールズと、『ルビンおじさんの冒険』(一九〇二)を自作したW・ヒースの活躍がめざましかった。

(吉田新一)

ロビンフッド Robin Hood イギリスの伝説的人物。一六〇〇〜一四七〇年ごろ生存していたといわれるが、歴史的根拠はきわめて薄い。貴族であったが、ゆえあつて国法に触れ、無法者としてシャーウッドの森に隠れ義賊となつて大男のリトル・ジョン、太つた和尚フライア・タック、知恵者ウィル・スカールレット、音楽好きの色男アラン・ア・テールなどを手下として神出鬼没の活躍をする。一五世紀ごろからバラードの主人公としてイギリス国民に親しまれた。一九世紀に入つて子ども部屋の英雄にもなり、バイルの『ロビン・フッドのゆかいな冒険』(一八八三)をはじめとして、その物語は数多く出版されている。

(三宅典子)

ロフティング ヒュー Hugh Lofting 一八八六〜一九四七 イギリスの児童文学作家。バークシャーのメイドンヘッド生まれ。イギリス人とアイルランド人の血を受けたロフティングは、子どものころから大の動物好きだった。一八歳の時、アメリカのマサチューセツ工科大学へ入学し、イギリスへ戻つてから土木技師になるが、一九二二年、再びアメリカへ渡り、定

住を決意する。第一次大戦中は、イギリス近衛連隊に属し、フランスやフランダースへ赴き、そこで傷ついたり軍馬が、手当てされることなく射殺されるのを見て、動物への深い愛情と、戦争に対する怒りを感じた。動物が正しい手当てを受けるためには、動物のことがわかる医者が必要だと考えたロフティングは、前線から、手紙を待つ息子と娘にあてて、動物好きの医者 of 絵物語を書き送つた。これらの手紙がまとめられて、『ドリトル先生アフリカゆき』(一九二〇)という本になった。これは大評判になり、ロフティングはついに、本職の土木技師をやめて、ドリトル先生物語を次々と書くことになる。第二作目は『ドリトル先生航海記』(二二)、続いて『ドリトル先生の郵便局』(二三)、『ドリトル先生のサーカス』(二四)、『ドリトル先生の動物園』(二五)、『ドリトル先生のキャラバン』(二六)、『ドリトル先生と月からの使い』(二七)、『ドリトル先生月へゆく』(二八)、『ドリトル先生月から帰る』(二九)、『ドリトル先生と秘密の湖』(四八)、『ドリトル先生と緑のカナリヤ』(五〇)、『ドリトル先生の楽しい家』(五二)があり、挿絵も全部自分で書いた。奇想天外なファンタジーの世界に、子どもばかりでなく大人までも空想を刺激され、読んでいくうちに、作者の戦争を憎む心と、命というものの貴さ、生きとし生けるものへの温かい愛情が伝わってくる。ロフティングは、カリフォ

ルニア州サンタモニカで四七年、六一歳の生涯を閉じた。我が国でも井伏鱒二の名訳で愛読者が多い。

『ドリトル先生航海記』ドリトルせんせい

*The Voyages of Dr. Dolittle* ファンタジー。一九二二年。ニューベ

リー賞受賞作品(一九三三)。靴屋の息子トミーは、ドリトル先生とともに、偉大な博物学者ロング・アローに会うため、はるか南方の浮き島クモサル島へ出かける。動物語を解する先生のおかげで、ロング・アローは命を救われ、浮き島の漂流も止まった。動物に対する愛情と親近感を深め、動物語が話せたらどんなにすばらしいだろうと、本気で思わせるファンタジーの傑作。

【参考文献】高杉一郎『英米児童文学』(一九七七 中教出版)

(谷口由美子)

ローベル アニタ Anita Lobel 一九三四ーポ

ランド生まれのアメリカの女流絵本作家、挿絵画家。

アーノルド・ローベルの夫人だったが、離婚した。その

作品世界は処女作『*Suen's Bridge* スーエンの橋』

(一九六五)などにみられるように、民話的要素を背景

にして登場人物のふるまいが織り成す非論理性とリズ

ミカルな話の筋が醸し出すユーモア性に大きな特徴が

ある。だが、戦争の残酷さを表面に押し出した『*Po-*

*tatoes*、*Potatoes* ジャガイモ、ジャガイモたち』(六七)

のような重厚なテーマも見逃せない。(定松 正)

ローベル アーノルド Arnold Lobel 一九三三ー

絵本作家、挿絵画家。アメリカ・ロサンゼルス生まれ。

夫人のアニタ・ローベルも絵本作家だったが、のちに

離婚した。その作品世界では、織り込まれているユー

モアと誠実さの諸相が見逃せない。『ふたりはともだ

ち』(一九七〇)における心和む温かい雰囲気や、それと

は裏腹に漂ってくる何とも心くすぐるユーモア性は、

この『雨ガエルとヒキガエル』シリーズの全編を覆う

要素となっている。この要素は、韻文形式の『*The*

*Ice-Cream Cone Cool and Other Rare Birds* アイス

クリーム・コーンのオオバンと珍しい小鳥たち』(七二)

にみられるように、牛乳ビンやドアの鍵が小鳥の形に

なっていく意外性にも表れる。そして、温かさや誠実

さという諸相を支えている最大の要素は、この作家の

作品でたびたび扱われる友情というテーマである。人

間に向けられる動物の愛情をさわやかに描く処女作

『*A Zoo for Mister Mustier* ミスター・マスターの動

物園』(六二)などがその例である。(定松 正)

ローマ神話ローマ Roman Myths (Mythology)

ローマ神話とギリシア神話は別個の物語群ではなく、

それぞれ密接に関連し合い重なりあう。いずれも、神

話とはいっても、神々のみが登場するのではなく、死

すべき人間と全能の神々とのかわり、または人間そ

のものを扱った説話群である。成立は無論ギリシアの

方がはるかに古く、紀元前八世紀までさかのぼるが、

政治的にギリシアが衰退し、時代がローマに移っても、ほとんどの物語はラテン語に翻訳されてローマにも伝わった。ローマ時代に入ってから新たに加わった説話や登場者もあり、サターンやその孫のファウナス、戦いの女神ペローナなどがその一例である。なお、ローマ神話についても、ギリシア神話同様、一九世紀半ばになってブルフィンチの『空想の時代』によりはじめた全世界に広く紹介された。

(三宅忠明)

**ロマンス** romance 文学用語。元来は中世ヨーロッパでラテン語で書かれるものに対して、俗語のロマンス語で書かれたものを指し、古代の伝説から恋愛や冒険を扱う非現実的な虚構の物語に発展していった。ロマンスが叙事詩や宗教物語と本質的に異なるのは、これが宗教的、政治的、教訓的な意図をもたず、純粹に娯楽のためにつくられる点である。一二世紀フランスでは聖者伝と武勳詩という二種のロマンスがあり、ともに韻文で書かれた。クレチアン・ド・トロワなど優れた作家が出て、『ランスロ』聖盃探究物語』『バラ物語』『狐物語』が書かれた。トマやベルールの手になった『トリスタン、イゾー物語』はドイツ、イギリスにも流れ、ブルトンの伝説に材を得た『アーサー王物語』とともに多くの人の愛好を得た。ロマンスという語は後に、物語文学、小説を指すことばともなるが、この語には大衆向け恋愛物語という語感もあって、英

語では主にノベルが使われる。(石沢小枝子)

**ロラン** Roman Romain Rolland 一八六六一一九四四 フランスの作家。公証人の子としてブルゴーニュのクラムシに生まれ、高等師範学校では史学を専攻、ペートーヴェンやワーグナーの音楽、シェークスピアやトルストイの作品、マルヴィエグ・フォン・マイセンブークやイタリア芸術の影響を受ける。大作『ジャン・クリストフ』(一九〇四―二二)において彼の才能は遺憾なく発揮され、偉大な音楽家の心のうちに生起する内的苦悩を描いた。寛大で気高い精神の持ち主ロランの興味は常に音楽の天才に向けられ、『ペートーヴェン研究』(二九―四四)を著し、音楽の人生に占める位置、主たる作品の解釈を行っている。もう一つの大作に『魅せられたる魂』(二二―三四)がある。第一次大戦中、平和を愛する彼は多くの攻撃的小冊子をフランス・ドイツに向けて発行した。一九一六年、ノール文学賞受賞、生涯を通じて美、平和、自由を追求してやまなかった。(牧野文子)

**ローリングス** マージョリー Marjorie Kinnan Rawlings 一八九六一一九五三 アメリカの作家。フロリダに住みつき、自然と格闘してぎりぎりの生活を営む人々の姿を、地方色豊かに描き続けた。代表作『仔鹿物語』(一九三八)は、貧しいながらも仔鹿を飼って楽しい日々を送っていた少年が、父親の苦闘に接してし

だいに生活の厳しさに目覚め、畑を荒す仔鹿を処分させられるという悲劇をきっかけに大きく成長していくという、感動的な物語である。(脇 明子)

ローン ウェン Van Loon 一八八二—一九四四

オランダ生まれ、のちアメリカに渡った作家。歴史家、ジャーナリスト、イラストラーターとしても活躍。数多くの著作の中に子どもの本も多く、中でも『人間の歴史の物語』(一九二二)は、ローンの名を高め、世界各国で翻訳されている。幼少時より過去の世界を探求することに興味をもち、歴史文学への第一歩はそのころすではじめられていた。これは単に歴史的事実の羅列に終わることなく、人間の歴史と世界を生き生きと提示した最初の子どものための歴史書となり、第一回ニューベリー賞受賞に輝いた。またこの本は歴史書として新しいページを子どもの本の世界に開いたばかりでなく、子どもに文学がもたらす意味を問い、アメリカにおける創造性豊かな新しい子どもの文学の第一歩をも踏み出させるものとなった。ほかに『聖書物語』(二三)が我が国ではよく知られている。(島 式子)

ロングフェロー ヘンリー ワーズワース Henry

Wadsworth Longfellow 一八〇七—一八八二 アメリカの詩人。大学卒業後、欧州へ留学、帰国してハーバード大学の教授となり、詩集を出版した。ドイツのロマン派詩人の影響を受け、教訓的要素に富む抒情詩や叙事

詩『エヴァンジェリン』(一八四七)は、日本でも広く愛唱された。代表作『ハイヤワサの歌』(五五)は、主人公が岩も砕ける手袋をはめ、魔法の靴をはいて、父親の西風に復讐するという物語詩。(田中瑞枝)

ロンゲン ビョルン Björn Rongen 一九〇六—

ノルウェーの作家、児童文学作家。首都の大学で勉強する貧しい田舎出身の神学生を扱った『*To senseter*』二つの学期(一九三四)で登場したが、一九五〇年代になって多くの児童文学を書きはじめた。野生の熊にさらわれて育てられる少女を描いた『*Anne Villdyntje*』野性の少女アンネ(五六)や、よそ者に対する村人の冷たい目を扱った『*Salam for livet*』人生のストラローム(六一)や、どんな苦しみにも負けずに生き抜こうとする強い意志を描いた『*Fem døgn på isfjell*』氷の山での五日間(五九)などで有名。現代児童文学を代表する作家。(山口卓文)

ロンドン ジャック Jack London 一八七六—一九

一六 アメリカの短編作家。サンフランシスコに生まれ、放縦な少年時代を過ごした後、カリフォルニア大学に進学。在学中に、クロンダイク川の金鉱の発掘をめざすゴールドラッシュに参加し、その経験をもとにして作家となる。処女作『オオカミのむすこ』(一九〇〇)で一躍有名となり、短い作家人生の間に、五〇冊にのぼる作品を残した。代表作である動物文学『野性の



呼び声』(〇三)と『白い牙』(〇五)は高学年の児童にも愛読されている。『野性の呼び声』はカリフォルニアの判事邸で飼われていたバックが、北方労役犬として売られ、橇犬としての厳しい労働と疲労の日々を送るうちに、その中に眠っていた野性の本能が呼び覚まされ、ついには狼の群れに身を投じる姿を描いたものである。他方、『白い牙』では野性の狼と犬の混血であるホワイト・ファンクが、バックとは逆に、人間に飼われることによってしだいに狼から犬化していく姿が描かれている。

(桂 有子)

## ワ

ワイズガード レナード Leonard Weisgard 一九

一六〇 アメリカの画家、イラストレーター。プラト・インステイテュートに二年在学して退学、商業美術、ダンス修業ののち、児童書の創作、イラストレーションに転じ、多彩な画材、技術を駆使し、多くの優れた作品を生む。『The Little Island 小島』(一九

四七)でコールデコット賞受賞。『Mr. Peaceable Prints ピーサブル氏絵を描く』(五六)の原画は、ソビエト、中近東諸国にて巡回展示された。

(渡辺茂男)

ワイルダー ローラ インガルス Laura Ingalls

Wilder 一八六七—一九五七 アメリカの作家。ウィスコンシン州の開拓農民の娘として生まれ、子ども時代は幌馬車で中西部一帯を渡り歩く生活を送った。一八歳で結婚してからはミズーリ州に落ちつき、やがて自らの少女時代、娘時代の思い出をもとにした物語を書きはじめる。「小さな家」シリーズがそれである。第一作目『大きな森の小さな家』(一九三三)はウィスコンシンの森の中の幼年時代を描写したもので、簡潔な語り口ながら当時の開拓民の生活ぶりを微細に描写し、作者自らの像をローラと名づけて、厳しい自然と闘いながら一家を支えていく両親の姿を通して成長する主人公のありさまに焦点を当てている。二作目の『大草原の小さな家』(三五)になって、一家の移住生活が始まる。森を抜け川を渡る幾多の苦難の様子は、作者の現実の体験を背景にしている。それは『ブラム・クリークの土手で』(三七)という三作目でも如実に描かれている。ローラの姉メアリーに襲いかかる悲運を描く『シルバー・レイクの岸辺で』(三九)、吹雪にさらされる一家を写实的に描く『長い冬』(四〇)などは物語作家としてのワイルダーの資質がみごとにした作品。『大草原の